近代日本政治史における『別荘』の役割

―葉山から見た第１次日英同盟―

神奈川工業高等学校（定時制）　加　藤　　将

はじめに

神奈川県内には、相模湾沿岸を中心に多くの別荘地を有する。別荘とは、一般的に「日常住む家の他に、避暑や避寒のために建てられた家」（『角川必携国語事典』角川書店、1995）と考えられる。しかし、政治史学者の御厨貴氏が「明治の政治家の多くは、自邸以外に複数の別邸を持っている。‥中略‥政治を想い政治を決定するために自らの自由になる時間と空間を確保」〈『権力の館を歩く』毎日新聞　2010〉や、奈良岡聰智氏が「政治家にとって、『別荘』は、単なる富や権力のシンボルではなく、修養、思索、親交、決断のための重要な場所」〈「近代日本政治と「別荘」―「政界の奥座敷」大磯を中心として　」筒井清忠編『政治的リーダーと文化』千倉書房、2011〉、「政治リーダーが思索を練り、緊密に連携し、果断に決断を下すことは不可欠であったが、『別荘』はしばしばその重要な舞台」〈「近代日本政治と「別荘」――「政界の奥座敷」大磯を中心として　」筒井清忠編『政治的リーダーと文化』千倉書房、2011〉となったと両氏が言及するように、近代日本政治史において「別荘」は避暑や避寒だけでなく、しばしば政治の舞台となり「政治を想い政治を決断」する場となってきた。

「別荘」が近代日本政治史の舞台に登場し「政治を想い政治を決断」する場になっていながら、近代日本政治史研究においての別荘地・別荘文化研究は、2000年に御厨氏が「軽井沢はハイカルチャーか」〈青木保・川本三郎・筒井清忠・御厨貴・山折哲雄『近代日本文化論　3　ハイカルチャー』岩波書店、2000〉を記すまで分析がされてこなかった。その後、奈良岡氏の上記研究内容をはじめ、小宮一夫氏が「『別荘地』伊東と若槻礼次郎」〈『伊東の今・昔―伊東市史研究第９号―』2010〉を書き、別荘地・別荘文化研究は徐々に進んできた。

別荘地・別荘文化研究の研究地域としては、御厨氏は鳩山一郎や馬場恒吾、白州次郎らの生活から軽井沢を中心に、奈良岡氏は伊藤博文や青木周蔵らの生活から大礒や那須などを、小宮氏は若槻礼次郎と伊東の関係から、それぞれ研究がなされている。

以上のように別荘地研究は、有力政治家と大礒や那須、軽井沢などといった有名別荘地との関係で研究・分析されてきた。しかしながら、皇室との関係も深く有力な政治家の別荘も多数存在した別荘地葉山と有力政治家との関係を記した研究は管見の限り存在しない。そこで本報告では、神奈川県葉山に別荘を所有し、明治30年代以降に有力政治家となった桂太郎と「別荘地・葉山」の関わりを軸に、第１次日英同盟において別荘地が果たした役割について記したい。

１　「別荘地」葉山の形成

別荘地葉山の形成について、葉山町堀内の森戸神社境内の石碑では、

「（前略）明治二十年中東京駐紮伊太利公使レナート、デ、マルティーノ氏甚タ葉山ノ風景ヲ愛シ創メテ其別業ヲ森戸ニ營ム（中略）先師エルウィーン、ベールツ先生モ亦其海岸附近ノ地ニト宅シテ暇日休息ノ處ト為シ頻ニ此地ノ保健ニ適スルヲ推賞ス池田徳潤男秋田映希子相前後シテ又別墅ヲ森戸丘陵ニ建ツ明治二十二年六月鐵路ノ通スルニ及ヒテ井上毅子モ亦ベルツ先生ノ説ニ聞キテ其冬一色ニ來リ住ス翌年夏金子堅太郎伯モ亦至ル尋テ有栖川宮家ノ別邸成ル明治二十七年ニ至リ其一

月ヲ以テ始メテ御用邸ヲ置カル是ニ於テ葉山ノ名忽チ天下ニ鳴ル（後略）」

と記されている。

別荘地としてのはじまりは、明治 20（1887）年、イタリア公使マルティーノや宮内省侍医ベルツ博士に辿れる。そののち明治 22（1889）年に横須賀線が開業すると、井上毅、金子堅太郎など明治政府の高官がここに別荘を設けた。明治 23（1890）年、有栖川宮熾仁親王が最初に別荘を建て、嘉仁皇太子（後の大正天皇）など皇族もしばしば滞在した。そして、ベルツ博士の勧めから嘉仁皇太子（後の大正天皇）の静養を兼ねた場所として、明治 27（1894）年に御用邸が建設されると、葉山に政府高官や財界人などが集まり「別荘地」が形成されることとなった。

表　主要人物の別荘

氏　名	竣工年	属性	住所	備　考	戦後	現　在
天皇家	M27		一色			
有栖川宮	M23	皇族	一色	後の高松宮邸		県立美術館別館
北白川宮	M26	皇族	一色		衆議院保養所	解体、空き地
東伏見宮	T3	皇族	堀内		イエズス公女会修道院付属幼稚園	
岩倉具定	M23	宮中	一色		御用邸付属邸	葉山しおさい公園
井上毅	M22	宮中	一色			
近衛篤麿	調査中	華族	堀内		高砂鉄工寮	住　宅
細川護立	調査中	華族	堀内	旧マルティーノ邸	住友火災海上寮	マンション
松平慶民	調査中	宮中	一色		住　宅	
河井弥八	調査中	宮中	一色		住　宅	
岡本愛祐	調査中	宮中	一色		住　宅	
桂太郎	M32	政治家・軍人	一色		住友、住宅	住　宅
山本権兵衛	M35	政治家・軍人	堀内	後藤邸徒歩 1 分	住　宅	マンション
後藤新平	調査中	政治家	堀内	山本邸徒歩 1 分	第一勧銀、東芝保養所	マンション
小村寿太郎	調査中	外交官	一色	桂邸徒歩 5 分		
金子堅太郎	M24	政治家	一色		付属邸	葉山しおさい公園
	T6		一色	団邸と隣接	住　宅	
団琢磨	調査中	実業家	一色	金子邸と隣接	住　宅	
青木盛夫	調査中	外交官	一色	子、青木盛久	住　宅	
林董	調査中	外交官	堀内		保養所	保養所
高橋是清	M32	政治家	一色		県警保養所 安田火災寮	老人ホーム・マンション
栗野慎一郎	M45	外交官	一色		ブリジストンタイヤ寮	住　宅
北里柴三郎	調査中	学者	堀内		別荘	マンション

福澤捨次郎	調査中	ジャーナリスト	堀内	林菫娘と結婚	大学寮	住　宅
安田善次郎	調査中	実業家	一色			住　宅
三井八郎右衛門	調査中	実業家	一色		基地司令官官舎、ホテル三井ハウス	マンション

池田京子「堀内の宮家・華族の別荘」『郷土史葉山』第８号（2011）
池田京子「一色の宮家・華族の別荘」『郷土史葉山』第９号（2012）より作成

２　別荘地「葉山」における政治家、桂太郎の役割

桂太郎は長州藩出身の軍人・政治家であり、伊藤博文や山県有朋ら明治政府の礎を築いた第１世代に続く、第２世代の中心人物である。第２世代には西園寺公望、山本権兵衛らがおり、西園寺とは、第１世代が政治の表舞台から引退した後に交互に総理大臣を務める「桂園時代」と呼ばれる一時代を形成した。台湾総督、陸軍大臣などを歴任し、総理大臣在職中には第１次日英同盟締結や日露戦争開戦と終結を行った。

桂は明治 32（1899）年に葉山に別荘を築いた。桂は、「伊豆の山相模の海を我家のにはの景色と見るぞ楽しき」〈『公爵桂太郎伝　乾巻』原書房、1967、ｐ952〉と歌にし、別荘から見る景色を好んで葉山の地を度々訪れている。第４次伊藤博文内閣の陸軍大臣を退いた後は、学校に通う子どもを除き一家総出で葉山の別荘に移り住み、それまでの政務の疲れを癒した。また、葉山に別荘を所有していたことから、道路建設への出資や葉山の森山神社への軍刀奉納などを行い、地域の発展にも尽力している。

後の話になるが、明治 34（1901）年８月４日には、桂の葉山別荘で伊藤博文と第１次日英同盟について協議がもたれた。この日伊藤は桂の求めから桂の葉山別荘に「長雲閣」という名を付けた。「長雲」という名は「長雲院殿忠譽義道清澄大居士」という桂の戒名にも使用された。桂は葉山の自らの別荘を晩年まで好んだのである。

３　別荘地、金沢会談・葉山会談の意義

第４次伊藤博文内閣の陸軍大臣を退いた後、桂は葉山で静養に努めていた。しかし伊藤内閣退陣により、明治 34 年（1901）６月２日、第１次桂太郎内閣を組織した。桂内閣は商工業の振興、軍備増強とともに、東洋の難局を解決するためイギリスとの同盟を視野に入れた協定を結ぶことなどを目的に発足した。

桂内閣成立後の明治 34（1901）年８月から、第１次日英同盟の本格的な交渉が開始された。イギリスとの交渉が本格化されると、日本国内でも日英同盟に向けた協議が政治家間でもたれるようになった。

桂は、日英同盟についての外交案件が政治の議題にあがると、同年８月３日に神奈川県金沢の伊藤博文別荘を訪ね、日英同盟について概要を説明し意見交換を行った。伊藤を訪ねた理由は、「日英同盟の問題の起こるや、先づ第一先輩の意見を糺し」〈『桂太郎自伝』ｐ256～257〉とあるように、総理大臣を退いた後も依然政界に影響力がある人物の意見を取り入れて政治の安定を目指したためと言える。

会談は翌４日にも開かれ、「（前略）伊藤は特に来りて、公を葉山に訪ひ、重ねて日英同盟の得

失を細論し、談は更に進みて、将来の極東問題に及び、結局英国にして善く我か希望と権利とを認め、我に有利なる条約を締結することに、同意するに於ては、之を締結して可なりとの議に一決し、伊藤は即座に筆を執りて、我か希望の要点を記述（後略）」〈徳富猪一郎編『公爵桂太郎伝　乾巻』原書房、1967、p1054〉とし、２日間の両者の別荘間での会談によって第１次日英同盟協議に向けた国内政治の地ならしがおこなわれた。

葉山での桂・伊藤会談で考えられた内容が、後に英国側と第１次日英同盟を協議する際の基礎となった。伊藤との会談を経て、８日に「太郎は更に閣員及び侯爵伊藤博文以下諸元老と熟議を重ね、此の機を以て英国と同盟を締結せん」としたイギリスとの交渉が非公式な形で開始された。

４　第１次日英同盟における「長雲閣」会議―別荘から見た国内政治―

８月８日、林董駐英公使にイギリスとの交渉を開始するよう曽根荒助外相から伝令があったが、当初は担当者間の顔合わせや意思疎通が中心であった。日英同盟についての交渉が非公式に開始されるなか、９月に伊藤がエール大学の記念式典出席のため渡米することとなった。桂は、この当時はまだイギリスとの外交交渉が非公式であったから、ロシアとの協調も視野に入れていた。国内には井上馨をはじめとしたロシアとの協調を推進しようとする勢力があった。

８月 26 日、伊藤の大磯別荘「滄浪閣」において伊藤・井上・桂の３者による会談が開催され、伊藤が渡米にあわせてロシアを訪問し動向を探ることが話し合われた。桂はイギリスとの交渉を中心に考えていたが、政界に第一線を退きながらも政財界などに影響力を持つ両者への配慮から会談がもたれた。会談内容は「大磯に於ける侯伯子の会見は太く政界の寂寞を破りて何事か沸騰したるかの如き思ひあらしめしが其重なる要件が外債並に外交問題にありしは愈よ疑ふべからざる」〈『読売新聞』1901 年８月 29 日号・『東京日日新聞』1901 年８月 28 日号「桂首相伊侯を訪ふ」〉と新聞に報道された。

井上は新聞報道が出ると、「桂子も世人之耳目を非常に憚り候由にて何場所可然哉との事に候間、東京以外は殊更洩泄容易に候間却て東京之方可然と答へ置申候。」と東京での会談が情報漏えいの恐れがないことを桂に伝えたと伊藤に手紙で書き送っている。井上は大磯での会談内容が漏れ、手紙を伊藤に送って以降、日英同盟など外交問題へ表立って関与しなくなった。

９月、伊藤が外遊に立つと入れ違いに、小村寿太郎が義和団事件の処理にあたる外務大臣に就任すると、日英間の交渉は軌道に乗り始めた。10 月になると、小村は桂、山本権兵衛海軍大臣、児玉源太郎陸軍大臣と協議し、第１次日英同盟を公式交渉とした。

その後、日英間の協議は大詰めを迎え、「明治三十四年十一月二十八日外務大臣官邸に開かれたる臨時内閣会議に於て英国政府の提出案に対する修正案として決定したるものなり但し字句の修正は外務大臣に一任することに決せられたる」〈宮内庁『明治天皇紀』明治 34 年 11 月 28 日〉と記し、閣議において各閣僚の同意を取り付けた。

しかし当時は、天皇の裁可を得るには閣議以上に影響力を持っていた元老各氏に同意が必要であった。そこで閣議決定後の「十二月八日葉山会議にて山県侯・西郷侯・松方侯・井上侯・小村外務及び予の間に於ては英国の提議に同意して然るべしとの議を決せり」との会議が「長雲閣」で行われ、第１次日英同盟締結の最終調整がされた。10 日、明治天皇が裁可を与えて、ここに第１次日英同盟が締結されることとなった。

おわりに

別荘地・別荘文化研究は、御厨・奈良岡両氏の研究成果もあり、別荘を「政治を行う上での修養、思索、親交、決断、決定の場」とする見方が中心である。そのため政界要人の別荘が存在した地では、「西園寺公望と興津」や「終戦工作と軽井沢」「中曽根康弘と日の出山荘」「吉田茂（大磯）と佐藤栄作（鎌倉）」などの研究が進んでいる。

しかし今回取り上げた葉山は、近年郷土史家の研究が開始されたばかりである。今後は、葉山の別荘と政治の関わりについて、日英同盟だけでなく、桂太郎を中心とした立憲同志会結成と別荘の関わりについても研究を行い、政治史における「別荘」の役割を葉山から考えていきたい。

≪参考文献≫

池田京子「堀内の宮家・華族の別荘」『郷土史葉山』第８号　葉山郷土史研究会　2011

池田京子「一色の宮家・華族の別荘」『郷土史葉山』第９号　葉山郷土史研究会　2012

徳富猪一郎編「公爵桂太郎伝　乾」原書房　1967

徳富猪一郎編「公爵桂太郎伝　坤」原書房　1967

内田順文「軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について」『地理学評論』62号　1987

小沢朝江「明治の皇室建築」吉川弘文館　2008

小宮一夫「『別荘地』伊東と若槻礼次郎」『伊東の今・昔—伊東市史研究第９号—』　2010

小林道彦『桂太郎』ミネルヴァ書房　2006

佐藤大祐「明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤」『地理学評論』76 号 2003

柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰」『日本歴史』462 号　1986

高梨　炳「葉山町郷土史」神奈川新聞社　1975

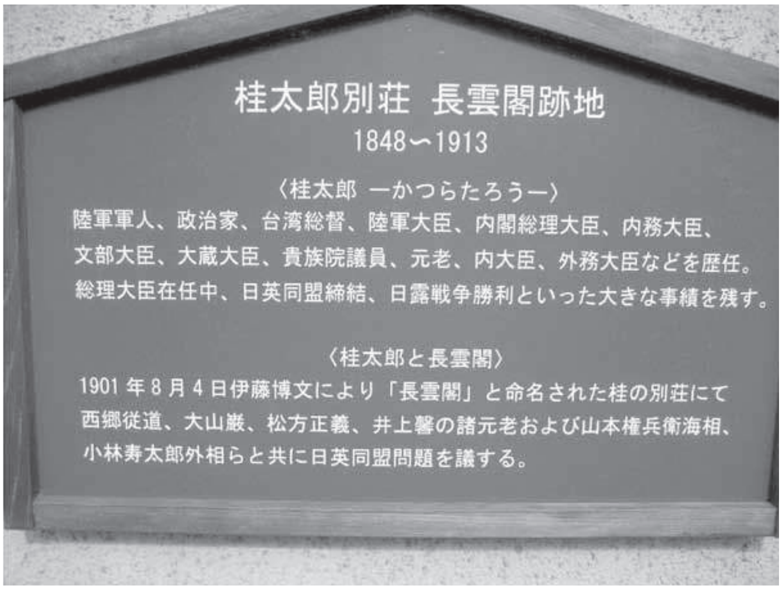
千葉　功「桂太郎」中公新書　2012

奈良岡聰智「近代日本政治と「別荘」—「政界の奥座敷」大磯を中心として 」筒井清忠編『政治的リーダーと文化』千倉書房　2011

藤谷陽悦「郊外住宅の史的研究—強羅別荘地の開発について」『日本大学生産工学部報告A』第20巻第2号　1987

御厨　貴「軽井沢はハイカルチャーか」青木保・川本三郎・筒井清忠・御厨貴・山折哲雄『近代日本文化論　3　ハイカルチャー』岩波書店　2000

御厨　貴「権力の館を歩く」毎日新聞　2010



「長運閣」跡地の案内板

道路を挟んで手前左が
「長運閣」跡地。
右は葉山御用邸付属邸。
現在は葉山しおさい公園。
ここに大正天皇が皇太子時
代から病気療養のため長期
滞在した。